広島工大
同窓会報

広島市外五日市町三宅
広島工業大学同窓会
発行者　中原重男
責任者　片山剛之丞
印刷　広島電話印刷株式会社

総会

—第10回定期総会報告—
同窓会奨学金制度発足

昨年の第九回定期総会において、中原重男会長は、会長挨拶の中で「昭和五十一年に同窓会創立十周年記念行事を行なう」との私見を述べられた。この会長の私見に基づき役員会で行事内容をたびたび検討した結果、

一、第十回定期総会を記念総会とし出席者の増大をはかる。また、懇親会を盛大に行なう。なお、会場は母校広島工業大学とする。

二、記念講演会を開催する講演者を横井庄一氏とする。

三、この十年間、同窓会に対しなみなみならぬ御理解と御協力をなされた教職員に感謝記念品を贈呈する。

四、五十一年三月発刊予定の同窓会誌第十号を記念号とし、内容の充実を図る。

などの行事をもって、十周年記念行事とすることが決議された。

この決議に基づき、去る五月四日（日）広島工業大学において、第十回記念総会が、中原会長を始め各役員、名誉会長の前川学長、名誉顧問の鶴総長を迎え、約五十人の会員の出席の中で開かれた。

総会は、会次第にのっとり、会長挨拶、名誉会長挨拶、議長選出、四十九年度活動報告、四十九年度会計報告、会計監査報告、五十年度活動方針、五十年度予算案審議、会則改正、終身会費審議、五十年度役員選出の順序で、例年通り予定時刻をはるかに延長し審議が行なわれた。

会長挨拶の中で、中原会長は、同窓会が創立以来苦難の道を歩みながらも一歩一歩確実に前進してきたことに率直な喜びを表明された。同時に、十周年を迎えようとしている同窓会の現状は、近年の異常なインフレによる財政難、会員の急激な増加による運営難、幹事会によってのみささえられている現在の活動難などの難問を抱え苦悩していることを赤裸々に訴えられ、会員諸氏の一層の会に対する関心及び奮励努力を期待された。

もし、今回の総会のような少数の出席者（役員を除いた会員の出席者は約二十五名）にみられるが如く、会員の同窓会に対する認識関心が今後も薄ければ、広工大同窓会はやがて衰退し消滅するであろう。今一度同窓会の必要性について自問自答すべきである。

次に審議事項を列挙する

○昭和四十九年度活動報告

一、昭和四十九年七月　同窓会会報第八号発行

一、昭和五十年三月　同窓会会誌第九号発行

一、昭和五十年三月　同窓会後援のヨーロッパ三か国観光旅行

一、自治会活動における賛助活動として、体育祭、大学祭、全国大会出場遠征などに援助金を支給

懇親会

一、他私立大学同窓会の現状調査

続いて会計報告、会計監査報告の審議がなされ、会員の異議がなく全員一致で承認された。（会計報告は別表参照のこと。）

○昭和五十年度活動方針

一、会員名簿の作成および訂正と、名簿第二号の発行

一、会報九号、会誌十号（記念号）の発行

一、自治会援助

一、支部設立の援助及び支部結成の奨励

一、第二回他大学同窓会現状調査

一、同窓会館設立の推進

一、同窓会奨学生制度の確立及び奨学金基金の寄付金徴集の実施

以上の項目が審議され承認された。

また、五十年度予算案及び五十年度役員案が全員一致で承認された。（予算案、役員案は別表参照のこと。）

また、奨学金制度については別記する。

○終身会費審議

一、終身会費を五十年度から八千円とする。

近年の異常なインフレにより、同窓会の支出が急激に増加し、現在の終身会費六千円の収入では、財政面より考えて、現在の活動を今後も続けて行く限り十年以内に財源が零になる。従って、役員会から、八千円への値上げ案が提案され審議された結果、全員一致で承認された。

○会則改正

〔会則〕

(一)第三章　役員

（改正案）

一、副幹事長　一名

(二)第六章　会計

（旧）

第十七条　準会員は正会員となる時終身会費として六、〇〇〇円を納めなければならない。

（改正案）

第十七条　準会員は正会員となる時終身会費として八、〇〇〇円を納めなければならない。

〔会計細則〕

(一)第二条（業務）会計は次の事務を行なう。

（旧）

一、同窓会入会金（終身会費および準会員入会金をいう）、寄付金およびその他の受入事務

（改正案）

一、同窓会入会金（終身会費および準会員入会金をいう）、寄付金、奨学金基金およびその他の受入事務

(二)第三条（帳簿）会計には次の帳簿を備え常に経理の明確を計る。

（改正案）

四、奨学基金出納簿

改正案がすべて全員一致で承認された。

以上が、第十回定期総会の概要である。総会終了後ただちに横井庄一氏の講演会（別記）が開かれ、ひきつづき懇親会が盛大に開かれた。

鶴総長、前川学長をはじめ諸先生方、自治会執行部横井氏など多数御出席いただき、また、工大フォークソング部、ホステス七名の特別参加をまじえ、なごやかな一時を過ごした。

懇親会

なお、同窓会創立以後今日まで、同窓会の発展に御援助下さった山本博教授同窓会顧問、寺本和子学生部課長、免出雅雄元会計課長（四十九年三月大学を退職）の三氏に感謝記念品が贈呈され、長年にわたる同窓会への心よりの御援助に感謝の微意を表しました。

最後にバンザイ三唱を行ない、各地区、各職場での健闘を誓い合い散会しました。

あなたはどう考える
同窓会の将来

昭和50年度役員案

◎会　　長：中原　重男(子)
◎副 会 長：村田　弘志(子)　大武　賢治(子)
◎幹 事 長：菅原　辰幸(建)
◎副幹事長：伊藤　秀敏(土)
◎会　　計：松江　孝博(機)　西田　弘展(経)
　　　　　　沖根　光夫(子)
◎会計監査：森本　房義(気)　中西　助次(機)
◎書　　記：重広　孝則(子)　中田　進一(土)
◎評 議 員：電子―河野　信義　河野　一幸
　　　　　　　　　瀬戸林　実
　　　　　　電気―畑谷　勝彦　石田　敏雄
　　　　　　機械―田村憲一郎　木村　一彦
　　　　　　　　　玉田　康荘　砂原　照雄
　　　　　　　　　藤川　正博　杉島　民雄
　　　　　　土木―大政　求　橋本千代司
　　　　　　　　　山岡　繁行
　　　　　　建築―青木　能典　秋本　孝
　　　　　　　　　有田　三郎　水野　良信
　　　　　　　　　知野　吉春
　　　　　　経営―峠　孝司　川口　典
　　　　　　　　　倉本　敏行
◎幹　　事：電子―砂田　謙二　川畑　敬志
　　　　　　　　　玉野　和保
　　　　　　電気―湯尻　照　猪上　憲治
　　　　　　　　　原田　義治
　　　　　　機械―片山剛之丞　小西　正明
　　　　　　　　　森滝美治郎
　　　　　　土木―福原　輝幸
　　　　　　建築―近松　一雄
　　　　　　　　　上之　博文
　　　　　　経営―河井　久　松広　斉
　　　　　　　　　近宗　貴　広重　隆

昭和49年度会計報告（S49. 4. 1～S50. 3. 31）

項目	収入	支出	残高
◎準会員入学金（389名分）（49年度入学生941名 昨年度552名分収入）	389,000		
◎総会会費	99,000		
◎広告料（8号会誌 9号会誌）	222,000		
◎ヨーロッパ研修	110,000		
◎終身会費（845名分）	5,070,000		
◎預金利息（定期、普通）	701,498 (551,963+149,535)		
◎予算支出		3,179,536	
合計	6,591,498	3,179,536	3,411,962

項目	予算	支出	残高
会誌発行費	1,525,000	1,067,560	457,440
会報発行費	308,000	176,600	131,400
総会開催費	545,000	312,650	232,350
自治会援助費	600,000	524,000	76,000
卒業生記念品代	500,000	422,400	77,600
通信費	30,000	17,581	12,419
消耗品費	150,000	49,040	100,960
交通費	50,000	25,680	24,320
会議費	54,600	62,280	△7,680
役員手当	88,000	61,500	26,500
支部費	50,000	0	50,000
調査費	50,000	22,020	27,980
備品費	320,000	298,500	21,500
委託費	330,000	91,370	238,630
予備費	400,000	48,355	351,645
合計	5,000,600	3,179,536	1,821,064

※49年度繰越金総額　27,653,613　　定期預金　25,276,338　　普通預金　556,211　　現金　1,821,064

昭和50年度予算

項目	金額
◎会誌発行費	2,134,000円
1.印刷費（200×7,500）	1,500,000円
2.郵送費（120×5,200）	624,000円
3.交通費	10,000円
小計	2,134,000円
◎会報発行費	331,000円
1.印刷費（20×8,500）	170,000円
2.郵送費（30×5,200）	156,000円
3.交通費	5,000円
小計	331,000円
◎名簿費	1,770,000円
1.印刷費（200×6,200）	1,240,000円
2.郵送費（100×5,200）	520,000円
3.交通費	10,000円
小計	1,770,000円
◎総会開催費	610,000円
1.懇親会	320,000円
2.講演会	150,000円
3.記念品	100,000円
4.交通費	10,000円
5.謝礼	20,000円
6.諸費	10,000円
小計	610,000円
◎自治会援助費	650,000円
1.大学祭（30,000×4+50,000×2+60,000）	280,000円
2.体育祭	170,000円
3.遠征費	200,000円
小計	650,000円
◎卒業生記念品代	500,000円
◎通信費	30,000円
◎消耗品費	150,000円
◎交通費（役員会出席その他）	50,000円
◎会議費（6×20×500 60,000 / 6×400 24,000）	84,000円
◎役員手当	93,000円
1.会計 3人	15,000円
2.会誌発行責任者	5,000円
3.会報発行責任者	2,000円
4.名簿	5,000円
5.その他（役員会日当）	66,000円
小計	93,000円
◎支部費	50,000円
◎調査費	50,000円
◎備品	40,000円
◎委託費	300,000円
◎予備費	200,000円
（◎奨学基金繰込み金	632,500）
	7,042,000円
	（632,500）
総計	7,674,500円

大学だより

同窓会諸君に望む

同窓会顧問機械工学科教授　山本　博

広島工業大学同窓会が創立されてから満十年を迎え母校と共に発展されたことを心からお祝い申しあげる。去る五月四日十周年記念祝賀式には万止むを得ない事情が突発的におこり、参列できず誠に失礼した。その式場で同窓会から感謝をこめられた立派な記念品を賜り厚く衷心よりお礼申しあげる。工大での最後の教員生活の日がくるまでは、皆さんの後輩指導のために懸命に努力する覚悟でおる、幸いまだ健康であるからご放念ありたい。

母校も堅実な成長をなし本年度の入学者は関西以西はもちろん、関東からの人数も増し天下の工大となりつつある。これからが大学の研究と教育は実ってくると思われる。ここまでに大学を育成されたのは学長であり総長である鶴襄先生（昭和四十八年四月より学長には前広大理学部長前川力先生、総長に専念され、学園全体の経営にあたられる）のなみなみならぬ熱意と努力に外ならない。

総長は常々十字架を背負う神の子としての信念を心にひめ、学園の企画運営に、学生生活の向上、教職員の生活などの諸問題に関して、短大創設以前から今日に至るまでの幾年月いつも熟慮断行、一度の失策も絶対に許されない集積であったと言っておられる。先生の神の前に跪かれた敬虔なお姿が脳裏に浮んでくる。ほんとうに神とともに歩む人である。私はよい大学に奉職できたと喜んでおる。同窓の諸君もよい大学を卒業されたと信ずる。

広大工学部に精密工学科が昭和三十六年に設置の正式認可を受け、工学部で第十一番目の学科として発足した時に、私が責任者となったが土地・金銭のことは一切心配なくただ人的、物的の問題だけで、鶴先生のご苦心ご苦労に比べれば足もとにも及ばない位の仕事であったが、それでも人の問題では苦労をした。

四十年三月には第一回の卒業生を社会に送りだし、修士課程の設置をみ、四講座も一応完成し研究発表数も増加し内容も向上してきた。しかしながら教員のほんとうの充実は十年を要している。なにかしら十年の努力が実を結び、次の十年に更に前進があるようである。前述の修士課程は三十七年に工学部に設置されたのであるが、その時に博士課程はそう簡単には認可できない。学位のある教授が年一回の論文を発表したとして、少なくとも十編はほしい。その学会で論文賞のとれるような立派な論文が書けなければ、他人の論文は読めないではないかと。文部省で言われたことがある。これも充実した十年が必要であることを意味している。

わが同窓会も今や満十年を迎え次への飛躍の基礎ができたと思う。実社会で活動されている諸先輩はその会社で責任のある地位につき熱心に仕事に励んでおられる話を聞く。増々ご自愛あって頑張られんことを祈って止まない。本年は昭和始まって以来の就職難になるのではないかと想像されるので、後輩のためにも張切ってやっていただきたい。

母校に勤務している同窓生は現在二十名各科においてそれぞれの分野で後輩への講義、実験、実習、卒論などの指導に専念されている。教育と研究を通して人間育成に努力するのが私学の姿であるかも知れない。多人数教育の問題はさておき、勉学に困難と思われる環境にあっても、同窓会としても母校に残っている者は一日も早く成長して、立派な教育者になって欲しいと願うものである。助手―講師―助教授―教授への道は楽ではない。

十年たてば助手は講師へ講師を十年すれば助教授へと、そんな物理的の問題ではない。研究の道は遠く険しいものであれば、よき指導者を得て研究のできる環境に居ることが望ましいがそれにも増して己が自ら進んで研究に熱心にとりくんで努力することのほうが大切であると思う。

殆どの同窓生は内地留学をし研究の何であるかは身につけられたが、期間が三か月の方々には誠に気毒であった。今後は少なくとも六か月以上行って貰いたい。己れを励まし実力をつけるために苦労の先取りをし、なまじかな気持ではなく、心を改め懸命に努力し頑張ってこそ、諸先生方のご指導を受けることが可能になる。

同窓生の諸君も時には母校を訪れ彼等を激励してやってください。風景絶佳であり諸君らが校庭の方々に植えた卒業記念樹も年々成長し、四季に咲く美しい花花の風情、ゆきとどいた校庭の様子などを改めて眺めていただくなら、環境は人力の及ばざる偉大な力が潜んでいることも感じとられるであろう。

終りに満十年を迎えた工大同窓会を基として、附属の諸学校を包含し、鶴学園全体としての同窓会へと発展されてはと念願する。

（五〇・六・六記）

横井庄一氏を迎えて記念講演
「生と死の極限の谷間に生きて」

六年ぶりに会場を母校に移しての総会後、同窓会発足十周年記念行事の一つとして講演会が催された。

講師には横井庄一氏をお招きし、物質的にも精神的にもその極限状態の中で二十八年間にもおよぶジャングル生活を送られた体験談を御披露頂きました。

当日は雨天にもかかわらず五日市・廿日市町民の方々も多数来場され、会場の四―二〇一大講義室がほとんど満席になるほどの盛況でした。

同窓会会員の皆さんへ

電気工学科助教授　榊　茂忠

会員の皆さん〝十周年おめでとうございます〟。

思えば昭和四十一年三月広島工業大学同窓会が発足して早や十年になります。

当時を思い起しますと今は亡き鈴木正利教授のご指導を得て同窓会会則が作られ発足の運びに至ったわけでありますが、発足当時の卒業生は最初の名簿によると短期大学卒業生一八四名大学卒業生八二名、合計二六六名でありました。勿論本同窓会発足前に短期大学卒業生による工友会がありこれを母体として同窓会が成立したものと思います。当時の卒業生諸君のことを思うと、極めて特長のある学生が多く、思い出深いものが多々あります。何時の日か諸君と久しく膝を交えて思い出深い話にふけりたいものだと考えています。

総員二六六名で発足した同窓会が現在では約六、〇〇〇名となり、益々隆盛の一途をたどっていることは誠にご同慶にたえないところであります。しかし、その反面物価の上昇などで経費の嵩むのも事実であります。

したがって、当時からの正会員終身会費も、過去十年間に相当の値上がりとなっていますが、それでもなお、本年度の総会においてまた会費の値上げを決定せざるを得ないのが今日の状態にあると聞いています。こうなれば、せめて名簿作製の時期だけでも卒業生諸君も教職員も何がしかの寄付を行ない、同窓会の盛立てに協力する必要があるのではないでしょうか？

本年度の同窓会誌を見ると、「本部だより」のところに「同窓会の岐路」と題して同窓会の財源難や運営活動方針の行きづまりについて論述されていましたが同窓会をより有意義な方向に永続させて行くためには会員諸君自ら立上がり、進んで総会に出席し、縦、横の連絡を密にし、連帯意識の向上に務め、同窓会の本質であるところの「有形、無形の扶け相」による会員の人間的、社会的向上と、後から続く後輩のために、母校の発展に寄与することを再認識する必要があると思います。

近く同窓会からも奨学資金が出るようになると聞いていますが、誠に喜ばしいことであります。

内外ともに不況とインフレに悩んでいる現在の世相を思うとき、お互に力を合せ、共に手を携えて行くことの必要性は新聞紙上での核家族的不幸の増加を見ても明らかであります。

広島工業大学同窓会の皆さん同窓会の無窮の発展に力を尽して下さい。

われわれ教職員も微力ながらご協力いたしたいと思っています。

―最近の研究室・ゼミ活動から―
「人の和と輪と環」

建築学科講師　西川加祢

卒業生の皆様お元気で御活躍のことと思います。こちら大学内でも随分変りました。私ども建築学科の研究棟も昨年九月完成し、同時に一号館四階から引越してきました。

窓からは田畑、住宅など自然の眺望もよく西広島バイパスを車が横切って行きます。暑くなるとともに朝日がさし込み、寒くなると日が当らなくなり、夏は暖房、冬は冷房の良く効くところである。しかし、以前のところとくらべ夏の暖房も西日が当るのに較べれば格段に楽である。そのうえ、製図室と図書館も近くになり、大きなケント紙をかかえて、雨の階段を走ることもなくなった。一号館一階にあったゼミ室も今は立派な教室となり、ゼミ学生もそれぞれ離散して行った。特に私のゼミ室は模型用鉄骨建物の中にあったので、狭いうえ、上からタオル、シャツなど吊り下がっていたので、冬などストーブに神経を尖らせていたのも今はなつかしい思い出となった。

ゼミ室と言えば今年から新カリキュラムにより「ゼミナール」が正式授業科目となった。現在「住宅」をテーマとする私のゼミには三年生十余名を中心に四年二年、一年生を加えかなり大世帯となった。ゼミ室も相当広くなったのであるが部屋の広さとともに、どうも横のつながりに弱いようである。それぞれが、バラバラに存在し、勝手に考え独断（？）で行動しているようである。（私の推察が誤っておれば幸いであるが……。）

つまり「人の和」と言おうか「相手を考える自分」と言うようなものが感じられないのである。まだお互いに顔なじみになっていないこともあろう。一つのチームにまとめ、何かをやろうとするまでに育ててあげるにはどうしたら良いか、もっぱら思案中である。このことは社会に出て尚、いっそう大切なだけに学生時代から培わねばと思っている。

最近のゼミ活動ではもっぱら実戦的経験主義をモットーに現地見学会を中心としている。

先日、第一回目として、五月十八日、広島県竹原市にある江戸時代に建てられた民家を見学することが出来た。そこで御主人の特別好意により、当時の設計図を見せて頂いた。

それは和紙に墨で描かれたものであったが、その中に紙で作った折たたみ式模型の一部に接することが出来、学生ともども非常な感銘を受けた。

和紙に住宅の立面を書きはさみで切っただけのものであるが、今から二百五十年も前に、このようにして考えたであろう跡が、目の前にうかぶようであった。

なんだか、そのシミに汚れた和紙―設計図―を見ていると時間的な隔たりを通り越してしまったような思いであった。そして頭の中だけで議論し、解ったような顔をすることの多い、私自身、反省しなければと思ったのである。

人間の頭の中のイメージと現物とのギャップを少しでも少なくするためには自分の手で、目で確かめる。――物ごとすべて通じるように思える。――

第二回目は現代最先端を行く「マンション」の見学会を行った。ここでは人間が共同で生活するとともにその間取りの取り方を合わせ勉強することが出来た。そして、新しい内装建材、流し調理台、バスユニットなど非常に参考になったようである。

第三回目はもっぱら計画中であるが、これらの結果が、どのように現在ゼミ生に受取られ消化されて行くか、今少し、期待と不安を抱きながら模索中である。

そして、学問追求ももちろん重要であるが、これらの活動を通し、「人の和・輪・環」が大切にされ、そのことにより、個人の「わく」を越えたより大きなことをなしうる社会人として育って行ってくれるように期待をかけるのは無理だろうか。

――これも大学と言う温室の中で言える私自身の甘えであろうか。――

「平凡を愛せよ」

一般教育講師　辻谷忠士

人は平凡な生活に飽きて新しい、珍しい、変化のある何かを求めようとする。そして、それを発見した時今まで経験したことのない興奮や感動を覚える。そのことは、その人にとっては一つの発展であり、変革であることが度々である。

然し、変化ある生活のためにのみ、変化を求めたり日常性の打破のためにのみ新しいものを求めるという態度は、発展でも、変革でもない。最も重要なことは単調と思えるもの、平凡と思えるものに感動し、更にそれらを愛しようとする態度が、変化を求めようとする精神の奥底になければならないことである。単調さ平凡さを愛することと、新奇さ、変化さを求めようとすることとは一見相反しているように思えるがこれらは一つのつながりをもっている。即ち、真に平凡さを愛するがゆえに、真に感動ある変化を求めようとするのである。そのようにして求められた変化は、一個人にとどまらず、多くの人々にも同様の感動を与えるであろう。それは、もはや、「創造」と言うべきである。そのような生活態度をもった人との語らいは心安ぐものがあり、生きていることとの実感を感じる。彼には偽りがない、誇張がない。あるのは、ものにたいする思いやりと、それによって培われた鋭い洞察力と、創造的意欲である。そんな人々で構成された社会は強く、永続すると思う。

人事異動

○新任

4月1日
- 基礎教育　特例教授　佐々木右左
- 電子工学科　特例教授　大脇健一
- 電気工学科　特例教授　岡沢哲夫
- 機械工学科　特例教授　稲尾民介
- 建築学科　講師　水田一征
- 土木工学科　助手　伊藤秀敏
- 土木工学科　助手　福原輝幸
- 建築学科　臨時助手　上之博文

4月5日配属
- 事務局庶務課（土木）　事務員　寺本清美
- 事務局庶務課（建築）　事務員　安達賀寿美
- 就職事務室　事務員　藤田順子

5月1日
- 建築学科　特任教授　葛西重男

○退職

3月31日
- 基礎教育　特例教授　光藤富士夫
- 一般教育　嘱託助教授　勝野井靖美
- 機械工学科　嘱託教授　高杉悌一郎
- 機械工学科　嘱託技師　古角金一
- 土木工学科　助手　大政求
- 土木工学科　臨時助手　橋本千代司
- 建築学科　臨時助手　古賀照明
- 事務局庶務課　事務員　若林敏子
- 事務局庶務課（機械）　事務員　田中秀子

5月15日
- 建築学科　助手　手越義昭

51年度より

同窓会奨学金制度発足

＝資金協力を！＝

第十回総会において、本学同窓会創立十周年記念行事の一環として、長年の懸案であった奨学金制度を、会則第一章第四条に基づいて、五十一年度実施を目標に発足させることが決議されました。特にこの五十年度はその準備期間として活動することに決定しておりますが、従来より自治会援助金の内、遠征費の残額を奨学資金として積立ててあり、現在六三二、五〇〇円の基金があります。

しかし、これらの資金では不充分なので、同窓生諸氏のあたたかい援助を賜りたく、別記の通り同窓会奨学資金の寄付行為制度を設け、現在実施致しておりますので、よろしく御協力下さいますよう役員一同お願い申し上げます。

同窓会奨学金資金

1. 金　　額　：　1口　　1,000円
1. 送付方法　：　郵便振替口座番号　　広島5956　　書留その他
1. 送付先　：　〒738　広島県佐伯郡五日市町三宅
　　広島工業大学同窓会奨学資金係

岩国支部発足

＝地区支部第二弾＝

岩国支部の有能なスタッフを紹介致します。

支部長	田原亮治	四十五年度卒
副　〃	田渕春荘	四十四　〃
〃	藤本智弘	〃
常任幹事	塩田守孝	四十六　〃
会　計	野村幸夫	四十八　〃
監査員	銀岡喜則	四十六　〃
〃	川村福久	〃
幹　事	重本忠範	四十三　〃
〃	岡崎賢治	四十九　〃
〃	兼城通安	四十七　〃
〃	岡本久夫	〃
〃	木下　隆	四十九　〃
顧　問	宮本敬治	岩国市市会議員
相談役	勝野井靖美	
〃	森川正晴	
〃	村田弘志	
〃	片山剛之丞	
〃	林　秀生	

広島工業大学同窓会岩国支部発会に当り

岩国支部長　**田原　亮治**

この度、岩国地区を中心とする同窓会岩国支部を発起するに当り、支部を代表致しまして、その主旨を一言述べたいと存じます。

我々、岩国支部同窓会々員は、恩師学長の「教育は愛なり」の教訓のもとに人間の本質的な在り方を確認すると共に、学園で学んだ教えのもとに、本部並びに支部を通じて人格の形成をさせつつ、これから社会人として巣立つ後輩達の指導に当ると共に同窓会支部の指導を迎いで、我々支部会員の社会的地位及び技術向上に努めたいと存じます。

この様な立場にある各地区の方々に於ても、当支部と同等又それ以上の条件下にある地区は多数と存じますが、岩国支部の発起を源に各地区の支部発会に少しでも役立てばと思います。

同窓会と言う団体である以上は、必ず先輩、後輩という関係が生れる事は事実です。ただその前者後者の関係だけでなく、自己啓発の場として自己錬成の場として、又会員相互の親睦の場としての支部であるべく今後努力するつもりです。

本部役員の方々並びに諸先輩、諸先生方の身に余る御協力、本文をもってよろしく御指導下さいます様、お願い致します。

心の手入れ

四七年電子工学科卒　**田口　伸治**

もう二年も前の事になるが、見事な、梅の盆栽を見る機会に、恵まれた事がある。「私が、毎日面倒を見ているのですよ……」と、その家の、主人は言っていた。二十数鉢余りあった様であるが、一つ一つが、均整の取れたものばかりで、盆栽には、まるで素人の私にさえ、心が洗われる様な快い印象を残してくれた。

今、あの盆栽に感動した理由を考えてみるに、梅本来の美しさは勿論であるが、それ以上に、手入れされているもののみが持つ美しさにあったのではないかと思われる。

そう言えば、奇麗に手入れされている垣根や、芝生、池、住宅などを見ると、そこに住んでいる人の人柄が知れる様で、私まで爽やかな感じにさせられる事がある。

手入れされているものが美しく感じられるのは、美しく、奇麗にしようと、一生懸命手入れする人間の心が、そのものに伝わっているからではないだろうか。

美しさの中には、人間の手を一切借りない、野生味を帯びたものもあるが、殆どのものは、人間の手入れしだいで、美しくも、醜くも成るものと言えよう。

海や川、山や空、そして食物……と、日本の自然の美しさを破壊し、環境を汚染し尽くしている公害。この公害にしてもよくよく考えてみると、多くの場合、自分の利益や生産性ばかりを追求して、周囲の迷惑を全く無視した、エゴイズムが生んだものである。人間の心の奥深くに根を張る、エゴイズムを浄化する以外、この解決は出来ないであろう。

この様に考えてみると、私達の身の回りは然る事ながら、私達人間こそ、世の中で最も、手入れの必要があるのではないだろうか。

私は、あの手入れの行き届いた美しさを持つ、梅の盆栽を思い出す度、自らの心の手入れをしていかなければと思うのである。

本部より

住所録の整備をしていますので、住所変更された方、された方を御存じの方は、同窓会事務室まで御連絡下さい。

会員だより

「雑感」

四五年建築工学科卒　**加藤　早苗**

実社会に巣立ってすでに幾星霜が経過したが、学窓の諸兄の音信に追想の面影を偲んでおります。全国に散在する学友の活躍ぶりは学園の栄誉をたかめるとともに、地域社会の発展に寄与しており同慶の至りであります。

さて、世界経済の動向が建築業界の浮沈に大きな動揺を与えている今日では、急速に低成長時代へ移行し、資源枯渇が叫ばれるに及んで、諸事節約、再生利用を図り、更に近代感覚と最近の技術導入による建築を推進することは並大抵のことではありません。狭い国土に一億人が暮すためには縦横に張りめぐらされた法律の網に精通し、地域環境の構成を熟知し、自他の権利義務を配意した建築こそ時代に即したものでありましょう。

建築は人間の為の器であり、ドラマの演出の場であったり、居ごこちのよい器であったりします。より豊かですばらしいものにするためには、芸術的要素も、技術に優るとも劣らない位大切です。そのためには建築家は、建築の工学的な面ばかりではなく、芸術的な面の追求も必要です。つまり、絵を画いたり、文学を読んだり、音楽を聴いたり、茶道、武道を嗜み、心の動き、人間そのものを探究する事が大事です。芸術と呼ばれているものの、全ての根底に流れているものを追求しセンスを養わねばなりません。やはり、建築も工学である以上、技術や法律は日々前進しています。

建築家といえども万能ではありません。日々勉学の継続で、たとえ僅かな成果でも、進歩をとげて完成への道を歩ゆまねばならない。

歴史上に輝かしい造形美を誇る遺跡の群落に驚嘆し、偉大な先達の建築に感動しながら、技術と芸術の谷間をさまよい、苦悩と困惑の渕に落ちこんでいるが「ローマは一日にして成らず」のたとえのように不断の努力をもって百年の大計をたてて、やりとげたいものであります。

私達の生活の周辺には学究的な事だけではありません。社会生活上のあらゆる喜怒哀楽が持ちこまれてきます。すぐれた建築家である前に好ましい社会人でなければならないことが痛感されます。

いささか愚見を述べて、筆を納めます。諸先輩をはじめ、学友諸兄のご繁栄とご健祥を祈りつつ。

今、思う事

四十九年建築学科卒　**新宅　英治**

「束縛されて手も足も出ない青春、こまかい気づかいゆえに、ぼくは自分の生涯をフイにした。あーあ、心がただひとすじに打ちこめる、そんな時代はもうふたたびこないものか。」……私の好きな詩です。

億単位のビルの仕事から比べると数百万円の小さな住宅などはチャチなものだと思われます。しかし、いくら小さな住宅でも施主の立場にしてみると、それは一生の事業であり一生の夢なのです。それ故に、たとえ小さなものでもバカにできないし、一生懸命やらなくてはいけません。提案した平面・立面が施主の希望によりどんどん変わっていきます。たとえ自分の満足がいかなくても認めなくてはいけない事もあります。施主と設計士の立場は患者と医者の様なものだと言いますが、「病気はオレが直してやるから言う事を聞け。」という様に家については言えません。その家を使うのは設計士ではなく施主なのです。それを忘れてはいけません。いくらいいデザインでも、施主が満足しなくては意味がありません。学生時代のあの予算もなく施主もいないデザイン優先の設計、ジレンマです。しかし学生に帰りたく思う時もたびたびあります。ただ、何の邪魔もなく一つに打ち込みたく思います。

私の事務所は所長と私との二人ですので、会社組織としてのチームワーク、人間関係などは分かりませんし、私自身、組織としての一員としてチームワークを組むことはにがてです。社会人としての意識もそんなにはありませんが、大学で勉強した事は役にたたないと感じます。

あたりまえのありふれた人間が若干でも優れた人間になるという事がいかにむずかしいかを感じます。「設計事務所にいかれない奴が施工会社に行くのだ。」と学生時代よく言われていましたが、そんな事は関係なくただその仕事を一生懸命やっているかどうかで決まるという事です。だから一日のうち1/3から1/2も費す仕事に対して生きがいを持つ事が大事です。ただ自分の生活を支える為に貴重な時間を使う事はあまりにもミジメです。仕事＝自分の生活にしたいものです。人間の一生なんてのは、「生活の改善と氏族繁栄。」だと言っているのを聞いた事がありますが、私にとって一生とはまだ言い切る事はできません。仕事に対して自信のない私にとって、ただ一生懸命やるしかありません。社会人二年目ですが、感じている事を書かせていただきました。

卒業記念樹　会計報告

昭和五十年三月二十五日

広島工業大学第十回卒業生有志殿

精算報告

科別	収入	品目	支出
電子工学科	25,900円	記念樹つげ（石碑共）	272,100円
電気　〃	25,000		
機械　〃	91,000		
土木　〃	33,500		
建築　〃	35,000	交渉関係交通費	600
経営　〃	58,500		
前年度繰越金	3,800		
計	272,700		272,700

領収証一通を付する

第十回卒業記念世話人

土木工学科　福原　輝幸　印

金　正俊　印

これからの文化局のありかた

文化局長　森本芳樹

第十三期文化局が、スタートして以来はや半年を過ぎてしまいました。この間何をしたかというと、二回のリーゼミぐらいです。

文化局本部、サークルとも後期に主な活動が集中しているようです。

工大には、現在体育系と文化系のサークルがありますが、文化系のサークルは全部で、二十六サークルで総勢三百余名です。全学生数が、三千七・八百人ぐらいでその内のわずかが、文化系サークルに所属している現状です。では、工大において文化局はどのように位置づけがなされているのでありましょうか。工大は理工系の大学であり、それによって、物の考え方自体が、文化系の大学と比較して、硬派なものになるのではないかと思います。

工大においては、文化意識が低すぎるのではないかとも思われます。人間形成の上で、重要な面は、文化にあるのではないでしょうか。もっとも、その基礎である、体力作りは大事でありますが。

ではどのようにして、工大生に、文化意識を植えつけるかということが、私達の使命でもあり役割でもあります。その方法として、学内講演会、討論会、あるいは、学内発表会、学内演奏会などを企画しています。これらは毎年、文化局としても活動方針としてあがっています「文化意識の向上」という項目に入っています。やはり、学外だけ見て行ないましても、学内のものが賛同して、一緒に行動してくれなければ、我我も、非常に動きにくいことは確かです。

我々が、何かを企画、実施致しましても、ついて来てくれなければ何のためにやったか、無意味となってしまいます。我々が、何か行動する時点において、まず考えますものが、どれだけの学生を動員できるかが頭に浮かびます。

よく人は、成功、不成功は別としてやることが、重要であるともいいますが、不成功に終わりますと、我我としても、納得ができませんし、参加した学生も嫌な気がするのではないでしょうか。

また、文化局というものは、発展しなければならない組織でもあり、それによって、あらゆる壁にぶちあたると思います。でも、我我は、その障害を一つ一つ打破して行動してゆかねばならないと思います。

文化局系サークルは、御存じの通り、ほとんどが、サークルボックスを中心として、活動しています。いわゆる部室兼活動場所であります。現在の所、今のサークルボックスでは思うように活動できませんし、また、やろうと思いましても出来ない状態であります。その点、体育系サークルは学校の施設と密着しているので、非常に有利であり、我々文化局としては、不利な立場であります。

その一つとして、学内発表の場としての施設がほとんどないことです。それゆえ、やむなく学外へ求めるという現状であります。もっとも、学外でやっているのは、工大意識の高揚をねらっているわけですが、それでも工大内をみわたすに文化面での施設が、少なすぎるという事は如実にあらわれてくると思います。

やはり、工大は、理工系の大学らしく、カラーというものを、文化面にとり入れて、もっともっと文化意識の向上をはからなければいけないと思うし、絶対にやらなければならないことでもある。

よく、三無主義とか、四無主義と人は言いますがこれは、各人気をつければ解消できると思う。しかし、うちの大学は四無主義だからだめであると言いますがじゃあ、この主義を作ったのはだれかというと、我々ではないでしょうか。この主義を打破するためにも、我々文化局はあらゆる企画をして、一般学生を参加させるつもりです。

文化局のサークルは、金銭的にも恵まれていないながらも、精一杯やっています。文化局サークルの活動をそれぞれみましても、広島においては、リーダー的立場をとっていると思われます。それだけに文化局としても、バックアップしてやりたいという気持が大です。

現在文化局は、音楽部門、芸術部門、技術部門、一般部門の四部門制をとっています。そして、それぞれ部門幹事を置き、部門別にクラブをまとめるという方向でやっています。音楽部門の中には、マンドリンクラブ、グリークラブ、フォークソングクラブ、軽音楽部ロック部の五サークルと、同好会のハワイアン同好会の六サークルで、日夜、武道館の地下練習で、練習しています。

また、芸術部門では、美術部、書道部、映画研究部写真部、放送技術研究部の五サークル部と、ソシアルダンス同好会、演劇愛好会の二愛好会とで成り立ち、創作活動に余念がありません。技術部門では、無線部科学部、基礎理論部、公害研究会、鉄道研究会などがあり、表面的には、あまり活動していないようにみえますが、中に入ってみますと、高度な技術を駆使してサークル活動をしています。また一般部門では、茶道部、囲碁将棋部、落語研究部、ESS、UFO、ラム、生物研究会、新聞部、エスペラント同好会、会計愛好会、などがあり、独自にユニークな活動を致しております。

ここで、部門別の発表会をあげますと、五月八日から十三日迄、芸術部門の、美術、書道、写真で、芸術展を県立美術館で開催いたしました。一応成功しましたが芸術部門としての発展の場所が、もう少しあればと思いました。音楽部門では第十回ライトミュージックコンサートが六月二十八日(土)広島市公会堂であります。今年は十回目ということで、局員一同頑張って是非成功させようと努力しています。一応、五サークル、マンドリン、グリー、フォーク、ロック、軽音で、盛大にやりたいと思っています。また、あとの二部門はこれといってありませんが、後半にむけて、合同発表会をやるつもりでおります。

またそれぞれのサークル活動をみますに、さる五月二十五日に、茶道部が、永照寺で御茶会を開催致しました。また、五月十八日にフォークソング部が、日立ファミリーセンターで、ミニミニコンサートを開催五月三十一日に、軽音楽部が、青少年センターにて、「第十五回定期演奏会」が開催されまして、大成功の内に終りました。六月二十五日には、ロック連盟の主催で、青少年センターで、ロックコンサートが行なわれます。これには、我工大のロック部も参加致します。また七月五日に、青少年センターにて、フォークソング部主催の定期演奏会が開催される予定であります。また、鉄研が、市内の模型店で、レイアウトの運転会を、六月七・八日に開催致します。主な活動をあげると、これぐらいです。あとは九月から十二月に行事が集中しています。

ここで言えることは、サークル活動が、決して、自己満足だけの活動であってはならないし、自分達の活動をもっと一般の人々に理解してもらうべきだと思います。名前を聞いただけでは、何をしているのか、わからないという例も出て来るでしょう。

今までのサークルは、そういう面が強かったように思います。ここらで軌道修正しなければならないのではないかと思います。また、それぞれの部員数は年々減少しています。現在、体育局、文化局合わせてもクラブ員総数が千名ほどです。まだまだ、工大生にとっては、クラブ活動は、縁遠いものではないでしょうか。

その原因として、前に述べたように、一般学生に何か還元出来るものが少ないのではないかと思われます。我が文化局としましても、一般学生が参加出来る大きな行事といえば芸術展と定演ぐらいです。これも学外において開催されています。

今まで一般学生を無視してきたと言っても過言ではないでしょう。そこに現在の文化局が、頭打ちに合っていると言えます。

これからは、一般学生が参加出来る行事を、金銭面の許すかぎり、学内で企画してゆくつもりであります。それによって、工大における文化局の位置づけというものが、確立されると思います。

準会員だより

私のスポーツ精神

体育局本部役員　住吉裕二

短かった春も走り去って行こうとしています。工大の空にも入道雲が、我が物顔に現われ照らす日々が、訪れるのを心待ちに待っている頃となりました。

私は、現在、体育局役員(体連の理事長)として、頑張っている者です。

私のスポーツに関する経歴を簡単に述べてみますと中学時代は、体操部、高校時代は、柔道部、そして大学生活の三年間は、自動車部。と様々な運動を行なって来ました。

自動車部においては、私の様な者に〝主将〟という大役をさせて頂きました。

「私のスポーツ精神」はこの大学三年間で、生まれたかの様に思われます。

私の短所は、短気で、無鉄砲で、頑固者等です。

又、私は両親と兄の四人家族の末っ子の甘えん坊でもあります。

私の理想とする人間像は「心の広い人間」という事です。

この言葉は、去年のサークル役員時での反省によって生まれた言葉です。それには、団体生活は、どんなに「力有る人間」であってもどんなに素晴しい、スポーツマンであっても、どんなに偉い人間であっても決して、一人では、何も出来ないと思います。又、団体生活を一人で行なうならばそれは、団体生活ではないと思います。

私は、役員を受けた当初あまりにも一人で走り過ぎていた様でした。この時は他の役員には、大変失礼な事をしたと深く反省しています。

あの頃の私は、私と接する人達に「話しにくいやつ」と言われていました。それから、私は、クラブで、多くの先輩方と「けんか」をしていました。今思うと勉強で、いそがしい夜等、わざわざ先輩の下宿に押しかけて行って、夜おそくまで言い合いもしました。けれども、その先輩方は、この〝わからず屋〟の私を、やさしく扱って下さいました。私には、その時その時の事が、大変勉強になったのだと思います。今でもその先輩方の怒っていた顔が浮んで来ます。

「男は、情熱を持って行動しなければならない。」と言っていた先輩………。

この先輩は、私が一年生の時、四年生の人でした。私は一年生の時からこの先輩に、あこがれていました。

「わがままを殺せ!」と言っていた先輩。

「クラブを愛せ!」と言っていた先輩。皆、これらの自動車部の先輩は、心のやさしい人達でした。けれども、私にはそれが不満でした。私にとってはそれが、やさし過ぎる様に思えたのです。それで、その不満を行動で示していました。クラブの問題児ともいわれていました。

そのような、クラブ生活をしていたある日、「お前を主将にする。」という前代の主将よりの言葉がありました。私はこの時「どきん」としました。

うれしさが少し、不安がいっぱいでした。

「お前が呉から来て時間的にも難しいと思うけれども、わしがその事も考えた上でお前を選んだんじゃけん、やってくれ。」この言葉を聞かされて私はあの一年生の時の先輩の「男は情熱を持って、やらにゃあいけん!」という言葉が、思い出された。そして、しだいに、体中「やってやるぞー!」という気持ちでいっぱいになっていったのです。しかし、この決心はだいぶ長かった様でした。そして、これからが「私の一生の思い出」となっていった日々なのです。

あの日、あの時のクラブの親友達の顔は今でも手に取る様です。

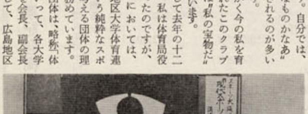
試合に破れてなさけない顔であった彼、試合に勝ってはればれしている彼、失恋をしてかなしそうな顔をしていた彼、クラブのコンパで大声でわめいていた彼、でも笑いのたえない日日でした。

私がこういったクラブの話をする時には、「目が生き生きしている。」と人はいいます。自分では、〝そんなものかなあ〟と驚かされるのが多い日々です。

とにかく今の私を育ててくれたこのクラブを、私は〝私の宝物だ〟と思っています。

こうして去年の十二月より、私は体育局役員になったのですが、体育局においては、〝広島地区大学体育連合〟という純粋なスポーツを考える団体の理事長を務めています。

この団体は、〝略称「体連」〟といって、各大学の学長を会長、副会長に推挙して、広島地区大学における公式的な総合体育大会を目的としているものです。



正式的に活動を行なって今年で、まだ二年目という事もあって、今は大学間の親睦を深める事に力を入れている状態です。

本加盟の大学は、広島電機大学、広島経済大学、近畿大学呉、広島工業大学の四校ですが、後々には広島地区にある全ての大学に加盟して頂く決心でおります。それが今からの体連の大きな課題で、それには「実績」と「信用」が、必要だと思っています。それで、去年は第一回体連キャンプを行ない、今年は第二回体連キャンプ、様々な親睦的行事、競技会等を予定しております。

体連キャンプは、二百名程の規模で七月十六日から十八日にかけて行ないます。又、体育競技会は十月十九日に五種目によって行ないます。

我々は、これらの小さいながらの行事を行なう事によって「体連としての目的」を達せようとしています。

以上の様な事が、私が工大において行なった事とか行なおうとしている事です。